

# 仁科記念財団

## 案 内

1990年6月

財団法人 仁科記念財団

# 仁科記念財団案内

## ま え が き

仁科記念財団は1955年に戦後いちばん早く学術振興財団として、わが国の原子科学の祖、仁科芳雄博士を記念して創立されましたが、そのとき以来毎年仁科記念賞の贈呈と定例仁科記念講演会をおこなっています。財団の設立当初の基金は、わが国財界からの寄付金2165万円と内外学界の個人からの寄付金334万円とから成るものでしたが、数年で使いきってでもその活動を有意義なものにする覚悟でした。もちろん、仁科記念賞は永続を希望したのですが、朝永振一郎博士（当初財団常務理事）らをはじめとする学界関係者の努力による活発な活動と、初代理事長洪沢敬三氏その他財界のかたがたのご配慮により、財団の意義が広く認められ、その後数次の募金によって、今日ではほぼ5億円の基金をもち、その利子で活動できるようになりました。

さて、資金面では、上に述べたような状況ですが、財団の存在の意義が広く認められ続けるためには、学界からの支持と協力が必要であります。そして実際、今日まで活動を続けることができたのは、古くからの財団関係者以外の、また財団法人の理事会、評議員会には席をもっておられない多数の研究者諸氏の、協力のおかげであります。

そのような支持と協力にこたえ、さらにその輪をひろげることを念願して、われわれは5年前から、「仁科記念財団案内」という小冊子を広く配布することにいたしました。それ以前には、講演会の記録を載せる広報誌NKZに、理事会、評議員会に提出する「事業報告および収支計算書」の内容の一部を付記するようになってきたのですが、それだけでは、講演記録に興味をもって購読なさるかたとか、講演会を聴きに來られるかた以外に対して、財団の広報がゆきとどきません。

この小冊子の「案内」という名まえは、戦前の財団法人理化学研究所が出していた同様な小冊子にあやかるものです。戦前の「理研」は、欧文と和文の研究報告の出版のほかに、毎年、各研究室の研究題目と所属研究者全員の氏名を記した質素な

小冊子を出していました。それには「寄附行為」という名の、ほかの法人では「定款」と呼んでいるものに相当する文書も掲載されていました。それにつけられていた「理化学研究所案内」という、かざり気のない名称は、当時の「理研」の気風をよく表していたように思います。それにならって名づけたこの小冊子が、すこしでも多くのかたに、仁科記念財団に対して親しみをもってもらい、支持者になっていただくのに役立てば幸いと存じます。

## 目 次

§ 1. 仁科記念財団はつぎの事業をおこなっています	1 頁
§ 2. 仁科記念賞について	2 頁
§ 3. 仁科記念研究奨励金について	3 頁
§ 4. 仁科記念講演会について	4 頁
§ 5. 財団出版物の普及にご協力ください	7 頁
§ 6. 仁科記念財団の活動——1989年度——	8 頁
談話室	13 頁
「財団法人仁科記念財団設立趣意書並びに寄附行為」(抄)	17 頁
役員名簿	23 頁
付 録	
仁科記念賞受賞者とその業績	24 頁
仁科研究奨励金贈呈先一覧	36 頁
海外派遣研究者一覧	41 頁

## § 1. 仁科記念財団はつぎの事業をおこなっています

### 1. 仁科記念賞贈呈

広義の原子物理学とその応用を中心とする研究分野における卓越した業績に対して銀メダルおよび副賞を贈呈します。

### 2. 仁科記念講演会の開催

ひろく原子物理学とその応用を中心とする学術の進展に関連し、かつ一般の関心事にもつながる諸問題を内容とした定例の記念講演会および同じ趣旨の地方講演会を開催します。

### 3. 仁科記念文庫の運営

当初は仁科博士の蔵書および寄贈によって追加された多量の図書を根幹としていましたが、現在は、仁科記念室および朝永記念室にある多数の貴重な資料の整理を主としており、その成果を広く利用しやすくするための作業をおこなっています。

### 4. 仁科記念研究奨励金の贈呈

- a. 小規模国際シンポジウム開催を援助し、
- b. 在外研究をする若い研究者に1年間の滞在費および旅費を支給します。

### 5. 外国のすぐれた学者の招聘

諸外国の指導的な科学者を招いて講演を依頼し、かつ我が国の研究者と交際し、討論に参加してもらいます。

### 6. 広報および調査

広報誌 NKZ その他講演記録等の出版、および仁科博士をめぐる科学史資料の収集調査をおこなっています。

## § 2. 仁科記念賞について

仁科記念財団の古い出版物、たとえばNKZの創刊号には、仁科記念賞についてつぎのように書かれています。

「仁科記念賞は、原子物理学およびその応用の分野できわめて優秀な成果をおさめた研究者に贈るものであります。この賞の特色は、功成名遂げた大先輩に贈られるのではなく、むしろこれからの活躍を大いに期待される若い研究者に贈られる点にあります。」

いろいろな賞が設けられるようになって現在の現在、仁科記念賞がここに示されている特色を失わないようにしようという方針は、当然でありましょう。この文面には、はっきりしないところがあることは否めません。しかしかには表現を詳細にしても、結局それは実例で示すことには及ばないということも真理であります。それで、1985年版の「案内」では、特に記念賞について述べることをしませんでした。

ところが、候補者の推薦を依頼するかたの範囲の拡大につれて、若いかたのなかには、業績の蓄積を重視して、先輩を推薦なさるかたもあり得ることと考えます。いままでの受賞者の名を見ても、受賞当時の年齢を思いうかべることは若いかたにはできるとは限らないからです。

そこで、「若い」ということと、「応用」ということについて、どのように考えるべきかについて、アンケートで意見を求めました。かなりのかたから回答があり、「若い」という点については、年齢制限を明示されたかたもありましたが、上述の文面の常識的解釈でよいとするのが大勢のようでした。

「応用」という字句は、基礎科学における原子物理学の応用という解釈が大勢でした。今日では、物理学の全分野が原子物理学に無縁でないから、受賞の対象とする分野は、単に「物理学」とすればよいという意見がありました。境界領域の研究の重視のために、物理以外の領域を、輪番的に物理と組みあわせてその年の受賞分野とするという案もありました。しかし、どちらも好ましくありません。そのような制限をせずに、独創的な研究があらわれたら受賞の対象とすべきです。その意味

では、候補者の推薦も、なるべく広い範囲のかたにご依頼するのがよいし、推薦された候補の数が増すと、選考の仕事もそれだけ大仕事となります。そのことを考慮して、推薦の締切を1カ月はやくして8月末日とした次第です。推薦依頼状がとどきましたら、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

### § 3. 仁科記念研究奨励金について

この研究奨励金は、最近では、小規模国際研究集会の助成と、わが国の若い研究者の海外での共同研究への援助にあてられています。

1985年版の「案内」に書きましたように、この奨励金は1979年度までは個人研究に対し毎年数件の助成をおこなってきました。将来性のある研究に対して少額ながら効果的な、いわば「呼び水」的な役割を果たしたのですが、1980年度に、当時の財団の財政的事情にかんがみて、いっそう効果的と考えられる小規模国際研究集会の援助に切りかえて、個人研究への援助は停止しました。その復活もたしかに望ましいことですが、独創的な研究の芽を育てると同じ役割が小規模国際研究集会によっても果たされることを期待しておる次第です。

小規模国際研究集会の助成は、つぎのような二通りの手続によっておこなっております。一つは仁科記念賞候補者の推薦をお願いするのとおなじ範囲のかたがたに財団から依頼状を送り、推薦していただきます。推薦者に、計画の詳しい記述までお願いすることは実際的でないと考えますので、早目にとにかく推薦をしていただき、それによって申請者に書式を送って具体的計画を記述していただきます。もう一つは、学会誌の欄を利用する公募です。「小規模」国際研究集会というものの定義は、総経費（参加費を除く）500万円程度までのものとします。そしてその申請に対して仁科記念財団から200万円以内の助成をおこないます。

研究者の海外での共同研究への援助について述べますと、仁科記念財団が派遣する研究者は、単なる留学生というよりも、派遣された先の国でおこなわれる国際共同研究の重要なスタッフとなっております。そして仁科記念財団から派遣されたと

いうことが、先方の国の大学や研究所に助手等の形で就職した場合にくらべて、ずっとよく研究能率をあげるのに役立ったというのが、いままでの海外派遣研究者の多くの人の声であります。

海外派遣研究者は公募して選考します。公募の主旨が若い研究者に徹底するように広報にご協力をお願いします。応募されるかたには、財団から選考にあたって参考にするためにご意見を伺うことのできる数名のかた（いままでの指導者および同僚）を指名してもらいます。滞在期間は1年とします（優秀な応募者にすこしでも多く機会を提供するため、そのように改めました）。なお年齢が35歳未満であること、在職者のばあいには所属機関の承認が得られることが必要です。

科学研究の国際協力が今後ますます重要性を増すことを考えますと、仁科記念財団の上述の二つの助成の意義をことに若い研究者が深く理解し、それを活用するとともに、自らもその事業の発展に積極的に寄与することが望まれます。

#### § 4. 仁科記念講演会について

仁科記念財団は、仁科博士の誕生日にあたる12月6日の前後に、定例の記念講演会を東京で催すほか、地方講演、高校理科教員のための講演会、外国の著名物理学者の来日のおりとか朝永博士のノーベル賞受賞の際とかの特別講演会などを、随時おこなってまいりました。

定例の仁科記念講演会は、1989年度ですでに35回をかぞえました。学者の名を冠したこの種の講演会で古い伝統をもつものが、欧米にはいくつもあります。そのような講演会は、永続してこそ真価が発揮されます。つぎつぎに育ってくる新しい世代が聴衆に加わるよう、年長の世代がその講演会の存在を語り伝え、白髪の老学者が若い聴衆と一緒に講演を聴く、というようになってこそ、文化的な国の講演会と言えましょう。そのようになるためには、永続すること、伝統がつくりあげられることが肝要です。

仁科博士は倦むことを知らない啓蒙家でありました。博士もはじめはジャーナリ

ズムが大きらいで、新聞記者をケンもホロロに追い返したり、わざとむずかしいことを言ってけむに巻いたりするくせがあったのですが、サイクロトロン建設をやるようになってからは、あちこちで講演したり、新聞・雑誌に書いたり、すこしも労を惜しまぬようになり、その豹変ぶりにはアッケにとられたと朝永振一郎博士は語っています。これは、巨大科学の研究費を得るためだけではありません。一般社会に基礎研究の意義を理解させる必要を強く感じられたからでありました。そのような講演に、門弟たちはしばしば宇宙線用の大きなサイズの計数管を持ってお伴をさせられたものです。

仁科記念財団の二代目理事長であった朝永博士は、師の仁科博士におとらず公開講演に熱心でありました。朝永博士の独特な話しぶりは聴衆を魅了したものです。その名人芸とも言うべき話術は、落語を愛好したためと巷間伝えられていますが、もっと根本的には、博士があくまで直観的把握を重んじ、ものの考え方の本質を伝えることに努められたからであると言うべきでしょう。朝永博士が仁科記念講演会にいかにも熱心であったかは、33回の講演会のうち9回までの講演をみずから引き受けられたことにもあらわれています。朝永博士およびそのほかの講演者たちの名講演の記録は、財団の初代理事長渋谷敬三氏の熱心な意見に従って発刊された財団の広報誌「NKZ」に掲載され、バックナンバーでそれらを読むことができます。バックナンバーのうちでもことに注目をひいているのは、朝永博士のノーベル賞受賞講演の日本語版とも言うべき1966年6月の特別講演の記録の載った「NKZ」No. 7であります。その講演はストックホルムでなされた英語の講演よりも倍も詳しく「こくのある」ものであります(その号は需要が多くて、いちばん早く再版されました)。

朝永博士は1978年病におかれ翌年7月に他界されましたが、病床にあっても仁科記念財団のことを気かけられ、ことに記念講演会については、つぎのように言われました。

「仁科記念財団は社会に向かって開かれた窓を持たなくてはならない。記念講演会はその大切な窓の役割を果たすべきものだから、すくなくとも定例講演会は努力して続けるべきだ。随時の開催というのではルーズになりやすい。」

晩年、朝永博士は財団が準備するものとは別の、数多くの講演会で話をしておら

れましたが、仁科記念講演会については、そのような特別な意義を強調しておられたのです。

仁科記念講演会は、いろいろな大学と共同主催という独特な形でおこなわれています。かつては「朝日講堂」のような大講堂を借りて、不特定な世間一般に向かって広報して来聴を待っていたのですが、その方式では、世間が派手になったのに負けないだけの広報をすることがむずかしく、ことに学生諸君には徹底しないうらみがありました。

そこで、数年前つぎのような方式にきりかえました。仁科記念講演会を学生や若い研究者の層に広く知ってもらうために、いわば「拠点校」の大学を輪番にきめて、すくなくともその学生は来聴しやすいようにする。まず都内の大学のいくつかに順々にお願いして会場を借り、その教授たちから学生に勧めてもらう。また他の大学の学生や若い研究者たちにも参加を呼びかけるという方式です。

この方式にしてから、すでに定例講演会を11回、そのほかに同じ方式の地方講演会を8回おこないました。幸いにして新しい方式は時宜に適していたと見え、どの講演会も、多数の学生聴衆を集めて盛大におこなうことができました。

大学と共同主催でおこなう方式の長所は、その大学の学生諸君が参加しやすいことのほかに、他大学の諸君を勧誘することによって大学間のかべを低くする効果が得られる点です。さらにまた、同窓生が顔をあわせる機会にもなるでしょう。こうして、貴重な伝統が育ちつつあるのですが、しかし、つぎの点も考慮する必要があります。まわり持ちで共催する大学が4つとか5つとかになりますと、当然一つの大学にとっては4年から5年の周期となり、そのあいだに学生がすっかり変わるだけでなく、教室員の異動もおこります。それゆえ、番に当たっていない大学でも、広報の点で協力していただき、それとともに、仁科記念講演会というものの意義について、新しい教室員に申しつぎをしていただくよう、ぜひお願い申し上げます。

## § 5. 財団出版物の普及にご協力ください

公開講演会は、仁科記念財団の重要な事業の一つですが、その講演会に来聴できなかった人のためにも考えるべきであり、講演記録をぜひ出版する必要がある、というのが、初代理事長故渋沢敬三氏の強い願望でした。また公開講演会について二代目理事長故朝永振一郎博士は、これは財団が社会に向かって開いている大切な窓だから、手をぬいてはならないという持論でした。われわれは講演会活動を活発にし、おこなわれた講演はできるかぎり記録を出版するように努力しております。そして出版されたものは、できるだけ多くの人々に読んでもらいたいと念願しております。

### 1. 個々のナンバーの有料頒布について

講演会の場合と同様、無料がよいという考えもあるかも知れませんが、無料で頒布すればよく普及するというものでもありませんので、有料といたします。そして、事務能力が不十分であることを考慮して、下記のようにしたいと存じます。

- (1) リストに載っているものを各冊一律に500円とする。
- (2) 郵送の場合、送料をリストに附記した概算で負担していただく。
- (3) 郵便振替を利用し、その用紙通信欄に、所属・職名等も記入していただく。

### 2. 図書館・図書室に置くことについて

仁科記念財団の講演記録シリーズも No. 31 にまで達しました。そして、古いものの中には、在庫切れで、再版をしたものもありますが、上述の有料頒布および財団関係者、寄附あるいは協力をしてくださったかたへの贈呈をした残りが、300部以上あります。これを死蔵すべきではないと考えて、大学や研究所のかたがたにつきのような内容のアンケート調査用紙をお送りして答えていただきました。

「仁科記念財団発行の講演記録の普及にご協力いただく方法」

- a. 図書館・図書室に有料で購入させる。
- b. 同様な出版物と交換する方式をとらせる。
- c. 無料で寄贈し、それを目のつくところに置かせる。

このアンケートに回答をいただいたかたのうちの2/3は、cにマルをつけてこら

れました。aを選ばれたかたは二十数名あり、またアンケート以前に大学に有料で購入させていただいた例も二、三件ありましたが、出版の本来の主旨からいって無料で多くの人の目にふれるようにすることは望ましいことですし、また、国立の機関のばあい、会計の手続が簡単でないこともありますので、cを選んだご意見にしたがうことにしました。bの「同様な出版物と交換する方式」を選ばれた回答はわずかででした。

上述のアンケートに対するご回答のなかに、「無料で寄贈」がよいが「但し、財団に大きな支出負担にならないなら」というご意見がありました。財団の出版物は形がはなはだ不揃いであり、合本にするというような新たな出費を要することはいたしません。しかし、郵送料はバカになりませんので、臨時的個人寄附でそれをカバーしていただければ幸いです。

結論を述べますと、図書館・図書室等に置いて、多くの人の目にふれやすくするために、無料で寄贈する、そして、そのことに賛成して紹介をしてくださるかたが、仁科記念財団へ小口の寄附をしてくださるとありがたいということです。それとともに、もう一つお願いしたいのは、この講演記録シリーズに今後加えられるものについて、事情を知っている後継者をつくっていただくことです。図書の保管については、専門の司書に世話をやいてもらうこととなりますし、今後の寄贈についても、係の人に事情を知っていただく必要があります。記念講演会の共同主催についてと同様に、わかい教室員への申しつぎの点でご配慮いただきたいと思います。

## § 6. 仁科記念財団の活動

— 1989年度 —

### 1. 仁科記念賞

本年度は下記2件2氏の研究に対して贈呈した。

受賞者 理化学研究所 主任研究員 谷 畑 勇 夫

研究題目 不安定核ビームによる原子核の研究

## 推薦理由

谷畑氏を中心とするグループは、米国 California 大学 Lawrence Berkeley 研究所の Bevalac を用いて、高エネルギー重イオンの核破碎反応で生成される短寿命核を 2 次ビームとして用い、新たな核反応を起こさせる方法を開発した。谷畑氏は、入射核破碎反応で安定線から遠く離れた不安定核が容易に生成されることに着目し、世界で初めて中性子過剰核を主とした不安定核ビームをつくり、全反応断面積の測定を行い、その値から不安定核の半径  $R_1$  が求められることを示した。さらに、中性子が極端に過剰な原子核の破碎反応角分布・クローン解離の研究を進め、安定原子核にはない異常な性質を見出している。このように、谷畑氏は、不安定核ビームを用いた原子核研究という新しい分野の形成に中心的役割を果たした。

受賞者 東京大学理学部 助教授 野本 憲一

研究題目 超新星の理論的研究

## 推薦理由

1987年、大マゼラン星雲でII型の超新星が発生した。それは特異な光度曲線をもつものであったが、青色超巨星が爆発したためであることを野本氏は示した。そこで、超新星の内部で起こった元素合成の様子が多量のガスに隠されることなく観測に現れることに、野本氏は着目し、中心部で爆発が始まってからガスが星のまわりに広がる間におこる諸現象を総合的に解明した。新たに分かったことは、II型超新星でもI型のように放射性ニッケルが合成され、爆発的に星の外層と混合されること、それは加速器系における不安定の成長によること、物質混合のために光度曲線が変わり、X線やガンマ線の放射される時期が速くなること、星間ダストが形成され、その成分は物質混合に依存すること、等である。これらは、X線衛星「ぎんが」や赤外線観測によって確認された。

## 2. 仁科記念講演会

本年度は次の記念講演会を開催した。

- a. 1977年度ノーベル物理学賞受賞者アンダーソン教授の講演会（慶応義塾大学理工学部と共同主催）

日 時 1989年5月18日(木) 午後3時～4時半(開場2時半)  
場 所 慶応義塾大学理工学部11棟31教室  
講 演 Theoretical Paradigms for the Sciences of Complexity  
P. W. Anderson 教授  
(アメリカ, プリンストン大学)

b. 地方講演会(信州大学理学部と共同主催)

日 時 1988年11月18日(土) 午後1時半～5時(開場1時)  
場 所 第1会場 信州大学経済学部大講義室  
第2会場 信州大学工学部(第1会場から中継)  
講 演 宇宙のはじまり  
京都大学理学部教授 佐藤文隆

映 画 「ニールス・ボーア」

c. 第35回定例講演会(学習院大学理学部と共同主催)

日 時 1989年12月9日(土) 午後2時～5時(開場1時半)  
場 所 学習院創立百周年記念会館  
講 演 放射能で年代をはかる  
学習院大学理学部教授 木越邦彦

映 画 「ニールス・ボーア」

3. 仁科記念奨励金

a. 対象: 電子・陽電子衝突物理についてのトピカルコンファレンス

1989年5月17日～5月19日

高エネルギー物理学研究所において

金額: 1,500,000円

代表者: 高エネルギー物理学研究所教授 菅原寛孝

参加者: 国内50名, 国外100名

b. 対象: 有機超伝導体の物理と化学に関する物性研究所国際シンポジウム

1989年8月28日～8月30日

東京大学教養学部において

金額：1,500,000円

代表者：東京大学物性研究所所長 守谷 亨

参加者：国内70名, 国外30名

c. 対象：International Symposium on VUV-SX Physics and Chemistry

1989年7月12日～7月14日

分子科学研究所において

金額：1,000,000円

代表者：分子科学研究所教授 井口 洋夫

参加者：国内50名, 国外7名

d. 対象：Physics with High-Intensity Hadron Acceleration

1990年3月14日～3月17日

駒場エミナースにおいて

金額：1,500,000円

代表者：東京大学原子核研究所長 山崎 敏光

参加者：国内100名, 国外30名

e. 対象：“Advances in Biophysics” vol. 25, 1989. ed. Masao Kotani の出版補助

金額：2,000,000円

代表者：東京大学名誉教授 小谷 正雄

印刷部数 1,000部

4. 研究者の海外派遣

1989年度海外派遣研究者

京都大学基礎物理学研究所 武末 真二

留学先：Rutgers 大学

研究目的：可逆セルオートマトンの熱力学的振舞

京都大学教養部 小林 健一郎

留 学 先：ハーバード大学

研究目的：Conformal Field Theory と String の Compact 化

東北大学理学部 高 木 滋

留 学 先：スイス連邦工科大学

研究目的：希土類及びウランの化合物での重い電子系の物性研究

## 2 年目継続

東京大学教養学部 錦 織 紳 一

留 学 先：Division of Chemistry, National Research Council of  
Canada

研究目的：金属錯体をホストとする包接化合物の化学

京都大学基礎物理学研究所 松 尾 泰

留 学 先：Enrico Fermi Institute, University of Chicago

研究目的：絃理論の幾何学的量子化

## 5. その他

Publication No. 30. [Kai Siegbahn: "From X-Ray to Electron Spectroscopy."]  
および Publication No. 31 [P. W. Anderson: "Theoretica Paradigms for the  
Sciences of Complexity", "Some Ideas on the Aesthetics of Scince"] を出版し  
た。

## 談話室

仁科記念財団の広報誌“NKZ”の創刊後まもなくの頃には、談話室欄を数々の貴重な文章が飾っていました。たとえば第2号の長岡治男氏（当時理化学研究所理事長）の「理研の現状と抱負」、第3号の山崎文男氏（当時仁科記念財団常務理事）の「アイソトープとともに10年」、第5号の我妻栄氏（当時仁科記念財団理事）の「頭脳労働はタダか？」等。降って第15号にも、茅誠司、瀬藤象二、中泉正徳3氏の座談会（山崎文男氏司会）の「アイソトープ協会の創業の前後」、第18号の「ドイツからの引上げ船上の手紙、朝永博士から仁科博士へ、1939年9月13日、靖国丸船上ニテ」のような資料的に注目すべき記事が載っております。それと同じ役割を果たさせるために、この「案内」にも「談話室」欄を復活させました。財団では、「仁科生誕百年」にそなえて史料室の整備に励んでいますが、「談話室」欄に、資料の一端を載せて、関心をお持ちのかたに読んでいただくことにいたします。

## ボーアのことば

5年前、ルーニス・ボーア生誕百年にあたりコペンハーゲンで行われた記念行事の際に、ボーアの業績と波乱に満ちた生涯をえがいたフィルムが上映され、世界各国から集まった人々の耳目を引いた。デンマーク政府が作らせたこのフィルムは駐日デンマーク大使館にももたらされ、仁科記念財団、日本学術会議、日本物理学会三者共催のわが国における記念講演会には間にあわなかったけれど、その年の定例仁科記念講演会や翌年の日本物理学会年会では、仁科記念財団が大使館から借りて上映した。その後、財団はデンマーク政府からこのフィルムを購入して、大学や研究所と合同の集会で上映するようにしている。

このフィルムは上下2巻から成り、上巻はボーアの研究所の国際研究協力の有様

を生き生きと描いており、下巻はポーアが大戦の終る前から戦後の核兵器競争を憂慮しておこなった活動を扱っている。その活動の頂点にあるのが1950年朝鮮戦争勃発の直前に出された「国道への公開状」である。その公開状でポーアが言おうとした真髓をポーアはデンマーク語で語っており、字幕にその英訳がつぎのように示されている。

To immerse ourselves in such problems ...  
in such sources of misunderstanding  
between human beings of different cultures ...  
one would hope ...  
to point out one way in which to improve  
the relation between people.  
This understanding is nowadays more needed than ever,  
for scientific development now hold out such great promise  
for improving the condition of mankind.  
Yet, at the same time, this makes it more imperative than ever,  
that we, on this little globe, find ways towards  
peaceful cooperation to develop and advance  
our common human civilization.  
It is not least within the field of science  
that we dare hope for cooperation,  
because maybe here, more than in any other human sphere,  
we feel ...  
in spite of differences ...  
that we are striving towards the same goal:  
To increase our experience and enlarge our understanding  
of that nature to which we all ourselves belong.

財団が購入したフィルムは英語版である。希望者のために日本語の仮訳(非売品)が作ってある。フィルムの上映は、学校、研究所等からの申し込みにより、財団と

共同主催の形の集会でおこなうようにしている（購入のときの約束による）。

## 劍橋教授 狄勒の印

中国の物理学者から贈られた印章を押したこの手紙は、The Principles of Quantum Mechanics 第2版の邦訳のためにほしいと頼んだ「日本語版への序文」を送ってくれたときのものである。ロシア語版についている附録「近似的な解き方」を日本語版にも入れたいというのに賛成して、この手紙と同様な小さい美しい字の手書きの原稿も送ってきた。返すまえに理研の写真部にライカで撮影してもらったが、小さくなりすぎて読みにくいので、残念ながらここには載せない。



ST JOHN'S COLLEGE,  
CAMBRIDGE.

25-3-36

Dear Nishina,

I have enclosed a short "Preface to Japanese Edition"

and also the manuscript about Approximate Methods which was included in the Russian edition. I think it would be useful to include it also in the Japanese edition. The Russians do not have any copyright agreements with other countries; so I do not suppose it is necessary to get their permission. Please return the manuscript to me when finished with, because I have no other copy of it.

The seals in the top left-hand corner were given to me by the physicists in Peking. Can you read them?

Please let me know how the translation is getting on.

Kind regards to you and Nagaoaka and Sugawara,

Yours sincerely,

P. A. M. Dirac.

## 「財団法人仁科記念財団設立趣意書並びに寄附行為」(抄)

委大第164号

財団法人 仁科記念財団

設立代表者 渋 沢 敬 三

昭和30年11月10日付で申請のあった財団法人仁科記念財団の設立を民法第34条によって許可します。

昭和30年12月 5 日

文部大臣 清 瀬 一 郎

---

**財団法人仁科記念財団設立趣意書**

文化勲章受賞者、日本学士院会員故仁科芳雄博士は、わが国の原子物理学の創始者であり、湯川博士等、世界的学者の育ての親でありました。博士が戦前、当時世界で第一級の大サイクロトロンを建設されたことは、そのサイクロトロンの悲劇的最後までともに、あまねく世に知られているところであります。

故仁科博士は、世界的な原子物理学者であったのみならず、戦後国歩艱難の時期に際しては、旧財団法人理化学研究所を潰滅の危機から救って株式会社科学研究所を興し、科学技術こそ国の経済復興の原動力であるという信念を貫かれ、身をもってこれを実践されました。博士はまた、その学識と円満な人格によって世界の学界の信望を一身にあつめられ、博士の存在がわが国の国際社会へのすみやかな復帰に大きな助けとなったことも、永く忘れることのできない点であります。

おもうに科学技術の振興は、国の自立復興上、万難を排して成し遂げなければならない喫緊事であります。なかんずく、博士が生前心血をそそがれた原子物理学が、人類文明にとっていかに重大な影響を与えつつあるかは、万人のよく知るところであります。原子力の重要性はいうまでもありませんが、原子物理学は今日先進諸国においては、生物学、工学、農学、医学等に広く応用されるほか、生産技術の方面

にも根本的変革をもたらしつつあり、この分野の著しい立ち遅れを克服することは、わが国の当面する重要課題の一つであります。

以上の趣旨により、今回私共は故仁科博士を記念し、原子物理学とその応用に関する研究の振興を目的として、仁科記念賞の授与、研究奨励金の交付、海外学者の招聘、研究者の海外派遣、記念文庫の設置、記念講演会の開催等の事業を行うために、広く各界からの御寄附を仰いできましたところ、国内および海外各方面から多数の方々の御賛同をえて、ここに2000万円に達する募金をみるに至りました。「仁科記念財団」はこの寄附金と故博士の蔵書とをもって設立されるものであります。

昨今わが国においても原子力の平和利用が声高く叫ばれておりますが、その健全なる発展は基礎科学とその応用との調和なくしてはこれを望むことはできません。この調和こそ故博士の理想とせられたところであり、本財団は必ずやその成果を挙げ、わが国科学技術の発展に寄与するのみならず、世界の原子物理学の進展に貢献せんとするものであります。

---

## 財団法人仁科記念財団寄附行為（抄）

### 第1章 総 則

第1条 この法人は、財団法人仁科記念財団という。

第2条 この法人は、事務所を東京都文京区本駒込2丁目28番45号におく。

### 第2章 目的および事業

第3条 この法人は、故仁科芳雄博士のわが国および世界の学術文化に対する功績を記念して、原子物理学およびその応用を中心とする科学技術の振興と学術文化の交流を図り、もってわが国の学術および国民生活の向上発展、ひいては世界文化の進歩に寄与することを目的とする。

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 原子物理学およびその応用に関する研究において、きわめて優秀な成果を収め

た者に対する仁科記念賞の授与

2. 原子物理学およびその応用に関する仁科記念講演会の開催
3. 原子物理学およびその応用に関する図書を蒐集公開する仁科記念文庫の経営
4. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う研究機関および個人に対する仁科記念奨励金の授与
5. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う学者の招聘および海外派遣
6. 原子物理学およびその応用に関する知識の普及を目的とする出版物の刊行
7. その他前条の目的を達成するために必要な事業

### 第3章 資産および会計

第5条 この法人の資産は、次のとおりとする。

1. この法人設立の当初に仁科記念財団設立発起人会が寄附した別紙財産目録記載の財産
2. 資産から生ずる果実
3. 事業に伴う収入
4. 寄附金品
5. その他の収入

第6条 この法人の資産を分けて基本財産および運用財産の二種とする。

基本財産は、別紙財産目録のうち基本財産の部に記載する資産および将来基本財産に編入される資産で構成する。

運用財産は、基本財産以外の資産とする。ただし、寄附金品であって寄附者の指定あるものは、その指定に従う。

第7条—第10条 略

第11条 この法人の決算は、会計年度終了後2ヶ月以内に理事長が作成し、財産目録、事業報告書および財産増減事由書とともに監事の意見をつけて理事会の承認を受け文部大臣に報告しなければならない。

この法人の決算に剰余金があるときは、理事会の議決を経て、その一部または全部を基本財産に編入し、あるいは翌年度に繰越すものとする。

第12条—第13条 略

第4章 役員、評議員および職員

第14条 この法人には、次の役員をおく。

理事 20名以上25名以内（内理事長1名、常務理事3名以内）

監事 2名以上4名以内

第15条 理事および監事は、評議員会でこれを選任し、理事は、互選で理事長1名、常務理事3名以内を定める。

第16条 理事長は、この法人の事務を総理し、この法人を代表する。

理事長に事故があるとき、または理事長が欠けたときは、理事長があらかじめ指名した常務理事が、その職務を代行する。

常務理事は、理事長を補佐し、理事会の決議に基いて日常の事務に従事する。

第17条 理事は、理事会を組織し、この法人の業務を議決し執行する。

第18条 監事は、民法第59条に定める職務を行う。

第19条 この法人の役員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

補欠による役員の任期は、前任者の残任期間とする。

役員は、その任期満了後でも、後任者が就任するまでは、なお、その職務を行う。

役員は、この法人の役員たるにふさわしくない行為のあった場合、または、特別の事情のある場合には、その任期中でも評議員会および理事会の議決によってこれを解任することができる。

第20条 役員は、有給とすることができる。

第21条 この法人には、評議員60名以上70名以内をおく。評議員は、理事会でこれを選出し、理事長が委嘱する。評議員には、第19条を準用する。この場合には同条中「役員」とあるのは、「評議員」と読み替えるものとする。

第22条 評議員は、評議員会を組織し、この寄附行為に定める事項のほか、理事会の諮問に応じ、理事長に対して助言する。

第23条 この法人に顧問若干名をおくことができる。顧問は、理事会でこれを選出

し、理事長が委嘱する。

顧問の任期については第19条を準用する。この場合には、同条中「役員」とあるのは、「顧問」と読み替えるものとする。

第24条 この法人に事務を処理するために書記等の職員をおく。

職員は、理事長が任免する。

職員は、有給とする。

## 第5章 会議

第25条 理事会は、毎年2回理事長が招集する。ただし、理事長が必要と認めた場合、または理事現在数の3分の1以上から会議の目的事項を示して請求のあったときは、理事長は、臨時理事会を招集しなければならない。

理事会の議長は、理事長とする。

第26条 理事会は、理事現在数の3分の2以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもって、あらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。理事会の議事は、この寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第27条 次に掲げる事項については、理事会において、あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない。

1. 予算および決算に関する事項
2. 不動産の買入れ、または基本財産の処分に関する事項
3. その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項

第25条および前条は、評議員会にこれを準用する。この場合には、第25条および前条中「理事会」および「理事」とあるのは、それぞれ「評議員会」および「評議員」と読み替えるものとする。

第28条 すべての会議には、議事録を作成し、議長および出席者代表2名が署名捺印した上で、これを保存しなければならない。

## 第6章 寄附行為の変更ならびに解散

第29条 この寄附行為は、理事現在数および評議員現在数のおのおの3分の2以上の同意を経、かつ、文部大臣の認可を受けなければ、変更することができない。

第30条 この法人を解散するには、理事現在数および評議員現在数のおのおの4分の3以上の同意を経、かつ、文部大臣の許可を受けなければならない。

第31条 この法人の解散に伴う残余財産は、理事全員の合意を経、かつ、文部大臣の許可を受けて、この法人の目的に類似の目的を有する公益事業に寄附するものとする。

## 第7章 補 則

第32条 この寄附行為の施行についての細則は、理事会の議決をもって別に定める。

### 付 則

第33条 この法人設立当初の理事および監事は、次のとおりである。

理事(理事長)	渋 沢 敬 三	理事(常務理事)	朝 永 振一郎
理事(常務理事)	村 越 司	理事	石 川 一 郎
理事	植 村 甲午郎	理事	亀 山 直 人
理事	酒 井 杏之助	理事	瀬 藤 象 二
理事	原 安三郎	理事	藤 山 愛一郎
理事	我 妻 栄	監事	茅 誠 司
監事	武 見 太 郎	監事	二 見 貴知雄

昭和34年6月1日 一部(事務所所在地) 変更認可

昭和41年11月8日 一部(理事および評議員の定数) 変更認可

## 役 員 名 簿

(1990年3月現在)

理 事 長	久保 亮五				
常 務 理 事	鎌田 甲一	玉木 英彦	宮崎友喜雄		
理 事	伊藤 昌壽	井上 薫	太田 清蔵	小田 稔	
	鹿島 昭一	佐波 正一	鳩山 道夫	浜田 達二	
	林 主税	原 禮之助	平岩 外四	堀田 庄三	
	三浦 功	三田 勝茂	森 英雄	山村 雄一	
	渡里杉一郎				
監 事	池田 長生	小山 五郎	佐々木秋生	瀬川美能留	
評 議 員	有山 兼孝	飯尾 正宏	池田 長生	伊藤 昌壽	
	井上 薫	岩佐 凱実	植村 泰忠	江口 禎而	
	江戸 英雄	太田 清蔵	岡本 耕輔	小田 稔	
	鹿島 昭一	鎌田 甲一	上坪 宏道	久保 亮五	
	小谷 正雄	小林 稔	小山 五郎	坂井 光夫	
	佐々木秋生	佐田登志夫	佐波 正一	杉本 正雄	
	鈴木 増雄	瀬川美能留	関本 忠弘	曾田 範宗	
	高木丈太郎	竹内 柁	竹中 鍊一	田島 英三	
	田中 靖郎	玉木 英彦	豊沢 豊	中根 良平	
	西川 哲治	西島 和彦	仁科雄一郎	西村 純	
	鳩山 道夫	浜田 達二	早川 幸男	林 主税	
	原 禮之助	平岩 外四	弘世 現	福井 伸二	
	藤井 忠男	伏見 康治	堀田 庄三	丸森 寿夫	
	三浦 功	三田 勝茂	宮 憲一	宮崎友喜雄	
	宮沢 弘成	宮島 龍興	向坊 隆	森 英雄	
	山崎 敏光	山村 雄一	芳田 奎	渡里杉一郎	
	和田 昭允				
事 務 局	横山 すみ	和田千代子	藤森みさき		

## 仁科記念賞受賞者とその業績

年度	受賞者	受賞業績
1955	大阪大学理学部 緒方 惟一氏	大型質量分析器の完成
	大阪市立大学理学部 西島 和彦氏	素粒子相互変換
1956	大阪大学理学部 芳田 奎氏	反強磁性体における磁気異方性エネルギー
	東京大学農学部 三井 進午氏	同位元素による植物の栄養ならびに土壤肥料学的研究
	農業技術研究所 西垣 晋氏	
	〃 江川 友治氏	
蚕糸試験場 潮田 常三氏		
1957	東京大学理学部 久保 亮五氏	非可逆過程の統計力学
1958	大阪大学理学部 杉本 健三氏	原子核の励起状態の磁気能率、および電気四極子能率の測定
	東京教育大学理学部 沢田 克郎氏	電子ガスの相関エネルギーに関する研究
1959	ソニー株式会社 江崎玲於奈氏	エサキダイオードの発明、およびその機能の理論的解明
	理化学研究所 中根 良平氏	化学交換反応による同位元素濃縮
1960	大阪府立大学理学部 吉森 昭夫氏	磁性結晶におけるスピンのらせん状配列の理論
1961	東京大学原子核研究所 丹生 潔氏	中間子多重発生の火の玉模型
	名古屋大学理学部 福井 崇時氏	ディスチャージチェンバーの研究と開発
	大阪市立大学理学部 宮本 重徳氏	
1962	京都大学理学部 松原 武生氏	量子統計力学の方法
	名古屋大学プラズマ研究所 高山 一男氏	低密度プラズマの研究—特に共鳴探針法の発明
	工業技術院電気試験所 佐々木 亘氏	ゲルマニウムの熱い電子の異方性の研究
1963	京都大学理学部 林 忠四郎氏	天体核現象の研究

年度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1964	東京大学理学部 岩田 義一氏	静電磁場における電子、およびイオンの運動に関する研究
	東京教育大学光学研究所 瀬谷 正男氏	真空分光計に関する研究
1965	京都大学教養部 三谷 健次氏	弱電離プラズマのサイクロトロン周波数における負吸収の研究
	名古屋大学プラズマ研究所 田中 茂利氏	
1966	大阪市立大学理学部 三宅 三郎氏	宇宙線ミュー中間子およびニュートリノの研究
	東京大学宇宙航空研究所 小田 稔氏	SCO-X-1 の位置決定
1967	東京大学物性研究所 豊沢 豊氏	固体光物性の動力学的理論
	広島大学理学部 小川 修三氏	基本粒子の対称性に関する研究
東京大学原子核研究所 山口 嘉夫氏		
1968	東京大学宇宙航空研究所 西村 純氏	超高エネルギー相互作用における横向き運動量の研究
	九州大学理学部 森 肇氏	非平衡状態の統計力学
1969	工業技術院電気試験所 近藤 淳氏	希薄合金の抵抗極小の解明
	大阪大学教養部 松田 久氏	原子質量精密測定用大分散質量分析装置の開発
1970	名古屋大学プラズマ研究所 池地 弘行氏	イオン波エコーの研究
	京都大学理学部 西川 恭治氏	炭素-14 による年代測定に関する研究
学習院大学理学部 木越 邦彦氏		
1971	東京大学理学部 西川 哲治氏	線型加速器に関する基礎研究
	東京大学原子核研究所 菅原 寛孝氏	基本粒子の対称性の応用
	ミュンヘン工科大学 森永 晴彦氏	インビームスペクトロスコピーの創出と原子核構造の研究

年度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1972	テンプル大学物 理学科 川崎 恭治氏	臨界現象の動力学的理論
	東北大学理学部 真木 和美氏	超伝導体の理論的研究
1973	京都大学数理解 析研究所 中西 襄氏	場の量子論における散乱振幅の諸性質の分析
	京都大学基礎物 理学研究所 佐藤 文隆氏	重力場方程式の新しい厳密解の発見とそれの宇 宙物理学への応用
	広島大学理論物 理学研究所 富松 彰氏	
1974	大阪大学教養部 大塚 穎三氏	半導体電子輸送現象のサイクロトロン共鳴による研究
	ニューヨーク市 立大学 崎田 文二氏	素粒子の超多重項理論および二重性理論の研究
1975	東京大学理学部 山崎 敏光氏	核磁気能率における中間子効果の発見
	東京大学物性研 究所 花村 榮一氏	多励起子系の理論的研究
1976	九州大学理学部 磯矢 彰氏	静電高圧加速器の研究とその新機軸の開発
	ロチェスター大 学理学部 大久保 進氏	強い相互作用による素粒子反応に対する選択規 則の発見
	名古屋大学理学 部 飯塚重五郎氏	
1977	東京大学物性研 究所 塩谷 繁雄氏	ピコ秒分光法による半導体の高密度励起効果の 研究
	京都大学基礎物 理学研究所 牧 二郎氏	素粒子の四元模型
	筑波大学物理学 系 原 康夫氏	
1978	分子科学研究所 廣田 栄治氏	高分解能高感度分光法によるフリーラジカルの 研究
	東京大学理学部 有馬 朗人氏	原子核の集団運動現象の解明
	東京大学原子核 研究所 丸森 寿夫氏	

年度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1979	東京大学物性研究所 守谷 亨氏	遍歴電子強磁性の理論
	高エネルギー物 小林 誠氏 理学研究所	基本粒子の模型に関する研究
	東京大学原子核 益川 敏英氏 研究所	
1980	大阪大学理学部 伊達 宗行氏	超強磁場の発生
	東北大学原子核 鳥塚 賀治氏 理学研究施設	原子核の巨大共鳴の研究
	京都大学理学部 九後汰一郎氏 プリンストン高 小嶋 泉氏 級研究所	非可換ゲージ場の共変的量子化の理論
1981	東京大学教養学 杉本大一郎氏 部	近接連星系の星の進化
	高エネルギー物 吉村 太彦氏 理学研究所	宇宙のバリオン数の起源
1982	筑波大学物理工 安藤 恒也氏 学系	MOS 反転層における二次元電子系の理論的研究
	(株)日立製作所中 外村 彰氏 央研究所	電子線ホログラフィー法の開発とその応用
1983	フェルミ国立加 山内 泰二氏 速器研究所	ウプシロン粒子の発見に対する貢献
	東京大学理学部 増田 彰正氏	希土類元素の微量精密測定と宇宙・地球科学への応用
1984	東京大学理学部 江口 徹氏 コーネル大学 川合 光氏	格子ゲージ理論
	東北大学理学部 石川 義和氏	中性子散乱による金属強磁性の研究
	学習院大学理学 川路 紳治氏 部	二次元電子系における負磁気抵抗および量子ホール効果の実験的研究
1985	マサチューセツ 田中 豊一氏 ツ工科大学	ゲルの相転移現象の研究
	新技術開発事業 飯島 澄男氏 団	少数原子集団の動的観察
	宇宙科学研究所 田中 靖郎氏	てんま衛星による中性子星の研究

年度	受賞者	受賞者業績
1986	東京大学理学部 鈴木 増雄氏	相転移秩序形成及び量子多体系の統計物理学
	広島大学理論物 藤川 和男氏 理学研究所	場の量子論における異常項の研究
	広島大学核融合 佐藤 哲也氏 理論研究センター	散逸性磁気流体プラズマの非線形ダイナミクス
1987	東京工業大学 高柳 邦夫氏	シリコンの表面構造の研究
	東京大学東京天 森本 雅樹氏 文台	ミリ波天文学の開拓
	〃 海部 宣男氏	
	東海大学理学部 小柴 昌俊氏	超新星爆発に伴うニュートリノの検出
	東京大学理学部 戸塚 洋二氏 素粒子物理国際 センター	
	東京大学宇宙線 須田 英博氏 研究所	
1988	名古屋大学理学 松本 敏雄氏 部	宇宙背景輻射のサブミリ波スペクトルの観測
	大阪大学理学部 吉川 圭二氏	ひもの場の理論
	東京大学物性研 齋藤 軍治氏 究所	有機超伝導体の新しい分子設計と合成
1989	理化学研究所 谷畑 勇夫氏	不安定原子核ビームによる原子核の研究
	東京大学理学部 野本 憲一氏	超新星の理論的研究

(受賞者の所属は受賞時のものによる。)

## 仁科研究奨励金贈呈先一覧

年度	贈 呈 先	研 究 題 目
1956	大阪大学理学部 山部昌太郎氏	陽子の軽原子による非弾性散乱の角度分布
	小林理学研究所 加藤 範夫氏	結晶完全度に関するエックス線の研究
	東京大学応用微生物研究所 宮地 重遠氏	トレーサーによる光合成の研究
1957	大阪大学理学部 渡辺得之助氏	中性子線回折研究用モノクロメーター
1958	名古屋大学農学部 斎藤 哲夫氏	トレーサーによる殺虫剤の作用機構に関する研究
	大阪市立大学理工学部 斎藤 喜彦氏	エックス線の異常分散の結晶構造解析への応用
1959	東京大学教養学部 石黒 浩三氏	極端紫外領域における固体の光学的研究
	東京大学大学院学生 石塚 浩氏	直線型プラズマ加速装置
	立教大学理学部 道家 忠義氏	低エネルギー重荷電粒子の各種気体に対する電離効率の研究
	東京大学原子核研究所 藤本 陽一氏	宇宙線の起源
	〃 小柴 昌俊氏	
1960	理化学研究所 鎌田 甲一氏	空気シャワーの高度変化
	東京大学原子核研究所 小田 稔氏	$^{14}\text{C}$ 定量による長期間の宇宙線強度変動の測定
	工技院名古屋工業技術試験所 榎本 茂正氏	$\beta$ 線による蛍光X線とその工業への応用
	東京大学医学部 宮川 正氏	中性子捕獲療法の一変法について—硼素コロイド使用
1961	東京大学理学部 武部 啓氏	微生物における放射線感受性の機構
	関西学院大学理学部 富家勇次郎氏	極低温単結晶構造解析とクライオスタット製作
	大阪市立大学理学部 三宅 三郎氏	2000 米以上の深さにおけるミュオン中間子の測定
1962	東京大学理学部 有馬 朗人氏	原子核構造の殻モデルによる研究

年度	贈 呈 先	研 究 課 題
1963	東北大学電気通信研究所 西沢 潤一氏	強電界半導体中におけるキャリアの拡散
	北海道大学理学部 三井 利夫氏	X線によるチタン酸バリウム系強誘電体の格子振動の研究
	大阪大学教養部 松田 久氏	分解能 1000 万程度の質量分析器の製作と測定
	東京大学教養学部 高木佐知夫氏	固体内電子のプラズマ振動と電子線の非弾性散乱の研究
1964	九州大学工学部 米田 泰治氏	X線の異常表面反射効果に対する研究
	東京工業大学 池上 栄胤氏	極低エネルギー電子の検出と原子核の微細構造
1965	東京大学教養学部 真隅 泰三氏	ポーラロンの研究
	名古屋大学理学部 大西 勁氏	生体膜におけるイオン輸送機構の研究
	東京大学教養学部 藤原 邦男氏	陽電子消滅法による固体内電子の運動状態の研究
	学習院大学理学部 長谷川博一氏	海底堆積物中の長寿命宇宙線生成物の研究
1966	名古屋大学理学部 三浦謹一郎氏	転移リボ核酸のアミノ酸暗号翻訳機構
	東京大学教養学部 伊藤 隆氏	放射線による突然変異誘発機構の研究—特に分子鎖仮説につき
	東北大学理学部 斎藤 一夫氏	金属錯化合物の同位体交換反応の研究
	大阪大学理学部 大塚エイ三氏	半導体中の電気的雙極子による電子散乱の研究
1967	東京大学物性研究所 小林 農作氏	偏極 $^{59}\text{Co}$ 核と偏極中性子との相互作用
	東北大学科学計測研究所 井上 鋒明氏	高速イオンの弾性散乱の研究
	大阪市立大学理学部 勝俣 五男氏	イオンセンシティブプローブ (磁場中プラズマのイオン温度測定法) の研究
	東京都立大学理学部 久米 潔氏	高感度磁気共鳴法による Kondo 効果の研究

年度	贈 呈 先	研 究 課 題
1968	東京大学理学部 和田 昭允氏 東京大学理学部 山崎 敏光氏	分子遺伝情報の電子顕微鏡による直接読み出し核反応による核整列：電磁気能率と核外場の相互作用
	立教大学理学部 白土 鈔二氏	速中性子による重陽子崩壊反応における終状態相互作用の研究
	京都大学理学部 宇田川 猛氏	体相関に基づく原子核の集団励起に関する研究
	お茶の水女子大学理学部 佐野 博敏氏	メスバウアー分光学による分子間、および分子内結合状態の研究
	金沢大学理学部 阪上 正信氏	U-237、Th-231 に関する放射化学的研究
	大阪大学理学部 沢田 康次氏	超音波による金属、半金属の電子的性質の研究
1969	学習院大学理学部 川路 紳治氏	InAs, Ge の真空中劈開面における二次元異常電気伝導の実験
	大阪大学理学部 小川 英行氏	DNA 障害修復の分子機構
	名古屋大学工学部 梅野 正義氏	電子-正孔プラズマの強磁場伝導現象の研究
	京都大学工学部 岡村 誠三氏	イオン-分子反応による放射線重合の初期過程の研究
	東京大学物性研究所 小林 浩一氏	イオン結晶の磁気光効果—ポーラロンからなるエキシトンおよびランダウ準位の研究
	東京大学工学部 国府田隆夫氏	外場効果によるイオン結晶の励起状態の研究
1970	東京大学理学部 須田 英博氏	超高エネルギー $\mu$ 中間子束の研究
	理化学研究所 小林 駿介氏	遠赤外レーザーによる半導体の光伝導に関する研究
	東京大学理学部 富永 健氏	ラジオガスクロマトグラフ法による無機化合物および有機金属化合物の放射化学的研究
	東京大学医科学研究所 吉川昌之介氏	細菌における染色体外性遺伝子 (Plasmids) 相互間の反応—特に R 因子を中心にして
	九州大学理学部 廣田 栄治氏	遠赤外レーザー分光による不安定分子フリーラディカルの研究
	大阪大学蛋白質研究所 栗木 芳隆氏	蛋白質合成系における GTP 加水分解反応と translocation の共軛機構の研究

年度	贈 呈 先	研 究 課 題
1971	東京大学工学部 堂山 昌男氏	陽電子消滅法による超高圧下の金属、合金、および半導体のフェルミ面の研究
	京都大学工学部 吉田 善一氏	金属同位元素によるポルフィリン錯体に関する研究
	東京大学物性研究所 生嶋 明氏	液体ヘリウムにおける臨界揺動の研究
	立教大学理学部 阮 建治氏	単一 Ge 結晶マルチゴニオメータの製作と応用
	東京大学教養学部 原田 義也氏	光電子分光法の分子性結晶への応用
	北海道大学理学部 相原 惇一氏	オキシカーボン ( Oxocarbon ) 類の固体物性の研究
	大阪大学微生物病研究所 竹田 美文氏	アミノアシル転移RNA合成反応の研究
	東京大学教養学部 桜井 捷海氏	レーザーと光子計数法による光子相関を用いた原子分子のエネルギー準位の研究
	九州大学理学部 間瀬 正一氏	強磁場中の半金属におけるエキシトニックフェーズの研究
	東京大学理学部 中井 浩二氏	超微細相互作用と不安定核モーメント
	京都大学工学部 宇尾 光治氏	ヘリカルヘリオトロン磁場の性質に関する理論的研究
	東京大学理学部 藤原 鎮男氏	無機錯体のガンマ線照射により生成するホットイオンの研究
東京工業大学理学部 川久保達之氏	非平衡系のゆらぎ現象に関する実験的研究	
1972	理化学研究所 高橋 旦氏	液体キセノンを用いた多線陽極比例計数管の試作
	福井大学工学部 神藤 洋爾氏	蛍光円二色性測定装置の試作と光学活性物質の構造解明への応用
	東京大学物性研究所 大林 康二氏	揺動および緩和減少の量子光学的研究
	京都大学原子炉実験所 東村 武信氏	極低温を用いた凝縮相放射線化学の初期過程の研究

年度	贈 呈 先	研 究 課 題
1973	東京大学教養学部 青木 禎氏	励起された原子分子集合体のコヒーレンス状態の研究
	東京大学理学部 清水 忠雄氏	レーザー二重共鳴法によるダイナミカルな分子過程の研究
	東京教育大学理学部 内野倉国光氏	混晶の二次ラマン散乱による研究
	お茶の水女子大学理学部 丸山 有成氏	トンネルスペクトロスコピーによる固体有機物の電子状態の研究
	岡山大学温泉研究所 酒井 均氏	鉱物-水間の $^{18}\text{O}$ の分配の実験的理論的研究とその地球化学的応用
	大阪大学理学部 音在 清輝氏	原子遷移による核励起の研究
	大阪大学基礎工学部 西田 良男氏	遠赤外レーザーによる励起子の分光的研究
	電気通信大学 井上 雅夫氏	イオンサイクロトロン共鳴による原子量の精密測定
	東北大学金属材料研究所 後藤 武生氏	二次元半導体における高密度励起子効果
	東京都立大学理学部 藤山 常毅氏	光散乱の微細構造の観測と液体構造
1974	富山大学薬学部 北川 泰司氏	過冷却粒子の生成に関する研究—ノズル・ビーム法の適用
	東京大学原子核研究所 小川 建吾氏	原子核集団運動の殻模型による理論的研究
	九州大学工学部 俵 博之氏	高電離重イオン衝突における内殻電離機構の研究
	大阪大学理学部 邑瀬 和生氏	ラマン散乱によるフォノン-プラズモン結合モードの分散関係の研究
	東北大学金属材料研究所 富吉 昇一氏	電子ライナックを用いたパルス法中性子非弾性散乱による遷移金属、非晶体等の高いエネルギー励起状態の研究
東京大学理学部 平川 浩正氏	中性子星からの重力波の検出に関する研究	
東京大学工学部 氏平 祐輔氏	ポジトロニウムの反応に関する研究	

仁科記念奨励金贈呈先一覧  
小規模国際研究集会 1980 年度より

年度	贈呈先	代表者	対象	参加者
1980	名古屋大学理学部	早川 幸男氏	Symposium on Space Astrophysics	国内 51 名 国外 10 名
1981	東京大学原子核研究所	寺沢 英純氏	1981 INS Symposium on Quark and Lepton Physics, Tokyo	国内 199 名 国外 22 名
	〃	藤川 和男氏		
	東京大学理学部	有馬 朗人氏	Symposium on Nuclear Collectivity	国内 19 名 国外 6 名
1982	大阪大学理学部	細谷 暁夫氏	Symposium on Gauge Theory and Gravitation	国内 152 名 国外 27 名
	大阪大学基礎工学部	長谷田泰一郎氏	International Meeting on Transition to New Type of Ordered Phase	国内 80 名 国外 37 名
1983	大阪大学核物理研究センター	小方 寛氏	1983 RCNP International Symposium on Light Ion Reaction Mechanism	国内 140 名 国外 44 名
	東京大学物性研究所	中嶋 貞雄氏	International Symposium on Foundation of Quantum Mechanics in the Light of New Technology	国内 120 名 国外 46 名
	東京大学宇宙線研究所	三宅 三郎氏	Cosmic Rays and Particle Physics	国内 95 名 国外 30 名
1984	高エネルギー物理学研究所	西川 哲治氏	Future Perspective on High Energy Physics International Committee for Future Accelerators	国内 20 名 国外 80 名

年度	贈呈先代表者	対象	参加者
	理化学研究所 野崎 正氏	5th International Symposium on Radiopharmaceutical Chemistry	国内 92 名 国外 105 名
	東京大学原子核研究所 西村 奎吾氏	1984 INS-RIKEN International Symposium on Heavy Ion Physics	国内 105 名 国外 42 名 (東京) 国内 102 名 国外 71 名 (山中湖)
	京都大学基礎物理学研究所 牧 二郎氏	The 7th Kyoto Summer Institute Dynamical Problems in Systems	国内 87 名 国外 22 名
	関西学院大学理学部 山田 晴河氏	International Symposium on Spectroscopic Studies of Adsorbates on Solid Surfaces	国内 66 名 国外 50 名
1985	東北大学理学部 糟谷 忠雄氏	The 5th International Conference on Crystalline Field and Anomalous Mixing Effects in f-Electron Systems	国内 118 名 国外 48 名
	京都大学基礎物理学研究所 佐藤 文隆氏	The 8th Kyoto Summer Institute Quantum Gravity and Cosmology	国内 100 名 国外 20 名
	群馬大学工学部 田沼 静一氏	International Symposium on Intercalation Compounds	国内 71 名 国外 44 名
	大阪大学産業科学研究所 川西 政治氏	The 8th International Symposium on Exoelectron Emission and Applications	国内 106 名 国外 23 名

年度	贈呈先	代表者	対象	参加者
1986	大阪大学核物理 研究センター	近藤 道也氏	6th International Symposium on Pol- arization Phenom- ena in Nuclear Phys- ics	国内 171 名 国外 134 名
	東京大学理学部	小柴 昌俊氏	7th Workshop on Grand Unification ICOBAN 86	国内 105 名 国外 50 名
	東北大学金属材 料研究所	武藤 芳雄氏	Joint Japanese-Sino Seminar on Super- conducting Materials	国内 58 名 国外 10 名
	理化学研究所	粟屋 容子氏	The International Seminar on Dynamic Processes of Highly Charged Ions	国内 38 名 国外 20 名
	東京理科大学理 工学部	尾立 晋祥氏	Few-body Approach to Nuclear Reactions in Tandem and Cryclotron Energy Regions	国内 35 名 国外 32 名
1987	東京大学理学部	永嶺 謙忠氏	International Sym- posium on Muon Catalyzed Fusion	国内 42 名 国外 33 名
	東京大学理学部	富永 健氏	13th International Hot Atom Chemistry Symposium	国内 90 名 国外 47 名
	東京工科大学	塩谷 繁雄氏	6th International Conference on Dyn- amical Processes in Excited States of Solids	国内 110 名 国外 78 名
	東邦大学理学部	佐々木 亘氏	The University of Tokyo International Symposium on An- derson Localization	国内 52 名 国外 52 名

年度	贈呈先代表者	対象	参加者
1988	高エネルギー物 理学研究所 高橋 嘉右氏	7th International Conference on Phys- ics in Collision	国内 98 名 国外 98 名
	宇宙科学研究所 田中 靖郎氏	International Sym- posium on The Physics of Neutron Stars and Black Holes	国内 60 名 国外 60 名
	東京大学原子核 研究所 加藤 貞幸氏	第 16 回 INS 国際シン ポジウム「ニュートリ ノ質量とその周辺」	国内 84 名 国外 24 名
	秋田大学医学部 滝沢 行雄氏	Second Internati- onal Conference on Low Level Meas- urements of Actini- des and Long-Lived Radionuclides in Biological and Envi- ronmental Samples	国内 30 名 国外 70 名
	京都大学理学部 寺本 英氏	The 2nd Japan- China Bilateral Sym- posium on Biophys- ics	国内 50 名 国外 30 名
	東京大学理学部 石原 正泰氏	International Sym- posium on Heavy Ion Physics and As- trophysical Prob- lems	国内 115 名 国外 30 名
北海道大学理学 部 赤石 義紀氏	Sapporo Internati- onal Symposium on Developments of Nuclear Cluster Dy- namics	国内 37 名 国外 27 名	

年度	贈呈先代表者	対象	参加者
1989	京都大学基礎物 理学研究所 高山 一氏	コンプレックスな物理系における動的協力現象に関する湯川国際セミナー	国内 88 名 国外 25 名
	宇宙科学研究所 高柳 和夫氏	Second Japan-China Symposium on Atomic and Molecular Physics	国内 26 名 国外 12 名
	高エネルギー物 理学研究所 菅原 寛孝氏	KEK Topical Conference on $e^+e^-$ Collision Physics	国内 100 名 国外 50 名
	分子科学研究所 井口 洋夫氏	International Symposium on VUV-SX Physics and Chemistry	国内 50 名 国外 7 名
	東京大学物性研 究所 守谷 亨氏	ISSP International Symposium on the Physics and Chemistry of Organic Superconductors	国内 70 名 国外 30 名
東京大学原子核 研究所 野村 亨氏	Physics and High-Intensity Hadron Accelerators	国内 100 名 国外 30 名	

(贈呈先の所属は贈呈時のものによる。)

## 海外派遣研究者一覧

年度	派遣者	研究目的	留学先
1956	小林理学研究所 森田 正人氏	原子核理論、素粒子論の研究	アメリカ
	東京大学教養学部 松浦 二郎氏	超ウラン元素の化学的研究	フランス
1957	東京大学教養学部 小出昭一郎氏	結晶内における遷移金属イオンの諸性質の理論的研究	イギリス
	東京大学農学部 麻生 末雄氏	ラジオアイソトープの農学分野における利用	アメリカ
1958	立教大学理学部 伊藤 隆氏	生物体におよぼす放射線の影響	アメリカ
1959	東京大学大学院数物系研究科 真隅 泰三氏	固体電子工学の基礎物理的研究	アメリカ
	東京大学原子核研究所 磯矢 彰氏	サイクロトロンによる核反応の研究	アメリカ
1960	東京教育大学理学部 池田 長生氏	放射化学、分析化学に関する新しい知見、技術の研究	ドイツ
	理化学研究所 佐田登志夫氏	機械工業における RI の利用	アメリカ
	東京大学原子核研究所 菅 浩一氏	空気シャワーの研究	アメリカ
1961	東洋紡績(株)技術研究所 上田 寿氏	放射線の固体高分子化合物中に生じたラジカルの電子スピン共鳴吸収による研究	アメリカ
	北海道大学理学部 渡辺 宏氏	結晶内 ions を marker として local な性質を調べる	イギリス
1962	大阪大学理学部 近藤 道也氏	加速器、ことに A. V. F. サイクロトロンの研究	アメリカ
	電電公社電気通信研究所 新井 敏弘氏	磁界中における半導体の光学的諸性質の研究	イギリス
1963	東京大学応用微生物研究所 金井 竜二氏	同位元素を用いた光合成機作の研究	ドイツ
1964	東京都立大学理学部 金子洋三郎氏	原子衝突の実験に関する研究	イギリス

年度	派遣者	研究目的	留学先
1965	ソニー株式会社 森垣 和夫氏 研究所	半導体内の電子状態の研究	フランス
1966	大阪大学理学部 溝淵 明氏	Van de Graaff 型加速装置を用いた原子核反応による核構造の研究	アメリカ
	東京大学大学院 香村 俊武氏 理学系研究科	素粒子の原子核反応、重粒子間の相互作用の研究	イギリス
1967	京都大学理学部 牟田 泰三氏	場の理論における複合粒子の条件	イギリス
	東京大学原子核 黒田 育子氏 研究所	原子核（中重核）の多体問題的方法、およびその構造について研究	デンマーク
1968	東京大学理学部 池田 清美氏	原子核構造の種々の側面の理論的 pursuit	ソ連、デンマーク
1969	東京大学理学部 山崎 昶氏	核磁気共鳴とその応用	ドイツ
1970	東京大学教養学 林 憲二氏 部	素粒子論ハドロンの表現	ドイツ
	東京大学原子核 永野 元彦氏 研究所	(1)水平シャワーの観測と解釈 (2)空気シャワーの芯の研究	ドイツ
1971	東京大学原子核 石原 正泰氏 研究所	インピーム $\gamma$ 線を用いた原子核構造、核反応の研究	スウェーデン
	東京大学物性研 栗田 進氏 究所	イオン結晶の遠赤外レーザーによるサイクロトロン共鳴、および帯間磁気光吸収の精密な測定により励起子および電子のポーラロン効果を研究	アメリカ
1972	東京工業大学理 八田 一郎氏 学部	誘電体の相転移の動的機構	イギリス
	東京都立大学理 広瀬 立成氏 学部	反核子偏極の測定及び $\bar{p}p$ 消滅における多重発生の研究	ドイツ
1973	東京大学理学部 永宮 正治氏	原子核の励起状態の電磁氣的性質の研究、および核スピンの物質中での超微細相互作用の研究	アメリカ
	東京大学工学部 海老沢丕道氏	(1)第二種超伝導体の輸送現象 (2)量子液体の磁氣的性質の研究	アメリカ
1974	東京大学理学部 高木 伸氏	液体ヘリウム3の異常相の理論的研究	イギリス

年度	派遣者	研究目的	留学先
1975	大阪大学教養部 大山 忠司氏	高密度励起子系における凝縮相の安定性とバンド構造の関係の研究	アメリカ
	東北大学金属材料研究所 黒田 規敬氏	層状半導体における非線形磁気光学効果の研究	アメリカ
	大阪大学理学部 仲伏 廣光氏	二段二重収束質量分析装置による原子質量の精密測定—原子質量の精密測定用 RF 質量分析計の再建作業、およびこれによる原子質量測定の研究	オランダ
1976	東北大学理学部 新村 信雄氏	TOF 中性子回折法による過渡現象の研究	デンマーク
	京都大学理学部 松柳 研一氏	中重核における集団励起モードの微視的理論の研究	デンマーク
1977	京都大学基礎物理学研究所 山脇 幸一氏	光的量子化の特徴である波動函数を用いてハドロン共鳴の分類の研究	アメリカ
	大阪大学理学部 片山 信一氏	IV-VI族化合物半導体の構造相転移の研究	アメリカ
1978	京都大学基礎物理学研究所 氷上 忍氏	相転移と臨界現象を理論的に研究	アメリカ
	筑波大学物理学系 外山 学氏	原子核反応の機構についての研究	アメリカ
	東京大学理学部 小野 義正氏	超流動 <sup>3</sup> He の輸送現象の研究	アメリカ
1979	東京大学宇宙線研究所 倉又 秀一氏	原子核乾板と他の測定器の複合装置を用いて行なわれるニュートリノ反応による新素粒子研究実験への参加	アメリカ
	大阪大学工学部 田口 常正氏	II-VI半導体の格子欠陥の生成、消滅機構の研究	イギリス
	岡山大学工学部 東辻 浩夫氏	高密度プラズマの理論	アメリカ
1980	横浜国立大学教育学部 佐々木 賢氏	ノンレプトニック崩壊などの諸現象を量子色力学を用いて研究	アメリカ
	早稲田大学理工学研究所学生 玉田 雅宣氏	宇宙線を用いた超高エネルギー核衝突による新しい型の核相互作用の研究	ソビエト

年度	派遣者	研究目的	留学先
1981	新潟大学理学部 鈴木 宜之氏	軽い核におけるクラスター構造と高励起エネルギーでの分子的共鳴	アメリカ
	東京都立大学理学部 遠藤 和豊氏	同時計数メスバウア分光法により、壊変によって生じる不安定な化学種の時間的推移をしらべる研究	ドイツ
1982	名古屋大学理学部 三宅 和正氏	超流動の物理の理論的研究	イギリス
	東京大学大学院理学系研究科 手嶋 久三氏	anomalous Ward identity における発散の処理の再検討及び dynamical Higgs mechanism の模型と 100 GeV 領域の現象への反映	アメリカ
1983	大阪大学理学部 城 健男氏	磁気体積効果等の物性の研究及び photoemission の実験で得られている動的な現象の理論的研究	イギリス
	北海道大学工学部 住吉 孝氏	放射線化学初期過程の研究にピコ秒の時間分解能を有する電気伝導法を用い、従来からの種々の高速分光法とあわせて詳細な説明をおこなう。	西ドイツ
1984	立教大学理学部 鈴木 昌世氏	電離放射線励起及び光励起に基づく希ガス・シンチレーション(混合系、凝縮層を含む)に関する実験的研究	スイス
	東京大学理学部 梁 成吉氏	格子量子色力学、クォーク・グルオンの力学系の非摂動的構造の解明	デンマーク
1985	京都大学理学部 清水 良文氏	高スピン状態における原子核の分光学的研究	デンマーク
1986	大阪大学教養部 川村 光氏	相転移現象の統計力学的研究	アメリカ
	理化学研究所研究員 神原 正氏	加速器を用いた原子衝突過程の実験	西ドイツ
1987	東京大学教養学部 原 隆氏	構成的場の理論及び厳密統計力学	アメリカ
	東京大学大型計算機センター 吉永 尚孝氏	16重極の自由度と相互作用するボソン模型	イギリス

年度	派遣者	研究目的	留学先
1988	琉球大学理学部 中里 弘道氏	確率過程量子化法とその応用	デンマーク
	東京大学教養学部 錦織 紳一氏	金属錯体をホストとする包接化合物の化学	カナダ
1989	東京大学理学部 松尾 泰氏 物理学教室	ひも理論の幾何学的量子化	アメリカ
	京都大学基礎物 武末 真二氏 理学研究所	可逆セルオートマトンの熱力学的振舞	アメリカ
	京都大学教養部 小林健一郎氏	Conformal Field Theory と String のコンパクト化	アメリカ
	東北大学理学部 高木 滋氏	希土類及びウランの化合物での重い電子系の物性研究	スイス

(派遣者の所属は派遣時のものによる。)

財団法人 仁科記念財団

113 東京都文京区本駒込 2 丁目 28 番 45 号  
電話 東京 03 (946) 7 1 1 1 (代表)  
郵便振替番号 東京 3-135934

(1990年6月) 1,200